

## 「分かる」「分かり合う」ことは なかなか難しい

顧問 廣川正昭



長年人と触れ合いながら人生を送り、その間、多くの人たちと「分かる」「分

かり合う」ことをめざして真剣に努めてきたつもりです。しかし、人と人が「分かり合う」ことの難しさをいやというほど知らされてきました。また、分かったつもりでもいざというときにさっぱり分かっていなくて、何もできないこともしばしばでした。本当に「分かる」ことはそう簡単なことではなく、なかなか難しいことのように思っています。

また、人には「分かっていてもなかなか実践できない」ことがよくあります。これは「知」と「実践」がズレているからでありましょう。「知」と「実践」という場合、「知」をどのように理解するかによって、結論としての「実践」が変わってきます。

日ごろ、次のようなことを「知」と言っているように思います。それは、「分かっていけるけれど行えない」というようなときです。ここで言う「分からせる」とか「分かる」とかの言葉の意味は、それほど単純ではないようです。何を根拠にそう言っているのかが問題です。説明がよくでき、試験の結果がよかった：で、百パーセントの人間の「実践」との合致には結びつかないのです。

また、知っているつもりでも、いざ実践という場合に知らない場合がよくあります。このように、「知」についても行えない場合があることも、よく承知しておかなければなりません。

なお、「知らなければ行えない」のも当然のことです。この場合、どのような「分からせた」かが問題なのです。

人間は生活経験の積み重ねなどから、知性や感性が発達して、この「知」と「実践」のズレがかなり克服されます。また繰り返し行うことで少なくなることも見られます。したがって、「知」をどのように理解するかが重要な鍵となります。ただ暗記して知っている程度では、物事を本当に理解したこ

とにはならない。知ろうとすることの背景やイメージなどもとらえていなければなりません。「分かる」ことの意味は、本当にヒダが細かく奥が深いのです。

さて、人間は限りなく個別の存在です。そのままではお互いが分かり合うということはありません。意味や考え方が食い違うのは当たり前のことです。分かり合うとする気持ちや努力がなければいつもすれ違いのままです。しかし、ここで、人の人間たる本来性が発揮されます。

人間同士が分かり合うために、人間に生まれつき備わっている能力が働きます。その能力とはお互いの信頼関係の中で育てられる信頼感のことです。信頼関係のないところには、お互いが分かり合うとする努力が働かず信頼感も育ちません。

人間は、本来お互いの食い違いを是正し、妥協させ一つの方向に物事を成し遂げる態勢をつくる力をもっているものです。これは人間のみがもつ素晴らしい資質・能力です。お互いが信じて頼りにする関係は、教育の場においてきわめて重要です。

(元開志学園高等学校)



## 学会ノート

学習指導要領には「内容項目の相互の関連を捉え直したり発展させたりすること」と書かれています。このことについて2つ考えていることがあります。

1つは、村上敏治が『道徳教育の構造』(明治図書、1973年)で述べた「価値分布」と「資料分布」の区別です。教材に複数の道徳的価値が含まれているというのは「資料分布」に過ぎず、諸価値の立体的な構造を捉える「価値分布」ではないということです。たとえば、杉原千畝を扱う教材に家族愛や遵法精神が含まれているというのは資料分布に過ぎません。「世界の平和」という主題に関連する価値は、むしろ人間愛(博愛)や連帯です。

もう1つは、諸価値の関連を捉える指導をするために、学習指導要領解説に諸価値の区別と関連を明記することです。諸価値を関連させて捉えるには、諸価値を区別する必要があると、自由と責任と言う場合の責任と、役割と責任と言う場合の責任の違い。「感動、畏敬の念」における気高さ(見て眺める対象としての気高さ)と「よりよく生きる喜び」の気高さ(崇高な生き方を追求する気高さ)の違い。こうした違いを明記して授業者を支援する必要があると考えます。

(高宮正貴)

### 文部科学省における道徳教育の新しい動き

昨年十二月二五日に、文部科学大臣から中央教育審議会(中教審)に「諮問」が行われました。「諮問」には、文部科学省としての現状認識、顕在化している課題、それを踏まえた具体的な論点(審議事項)が示されています。この「諮問」は、A4で五頁です。ぜひ、全文をお読みください。

現状認識としては、子供たちを取り巻くこれからの社会の状況と、現在の学校現場の状況について、大きく二つに分けて示されています。顕在化している課題としては、①主体的に学びに向かうことができていない子供の存在について、②学習指導要領の理念や趣旨の浸透は道半ばということについて、③デジタル学習基盤の効果的な活用についての三点が示されています。これらを踏まえて、子供たちが社会で活躍する二〇四〇年代を展望するとき、初等中等教育が果たすべき役割はこれまで以上に大きいこと、教師の努力と熱意に対して過度な依存はできず、教育課程の実施に伴う負担への指摘に真摯に向き合う必要性について述べられています。そして、具体的な論点(審議事項)として、以下の四点が挙げられています。

1 質の高い、深い学びを実現し、分りやすく使いやすい学習指導要領の在り方

2 多様な個性や特性、背景を有する子供たちを包摂する柔軟な教育課程の在り方

3 これからの時代に育成すべき資質・能力を踏まえた、各教科等やその目標・内容の在り方

4 教育課程の実施に伴う負担への指摘に真摯に向き合うことを含む、学習指導要領の趣旨の着実な実現のための方策

今後、中教審での議論の内容を分りやすくお伝えしていきたいと考えています。ぜひ、議論をフォローしていただける幸いです。

さて、令和5年度の全国学力・学習状況調査の追加分析や小学校学習指導要領実施状況調査からは、道徳教育、その要である道徳科の取組が児童生徒の自己有用感や幸福感、多様な考え方を理解しようとする態度等の向上に有効である可能性が示唆されたところがあります。

教育振興基本計画では、「持続可能な社会の創り手の育成」と「ウェルビーイングの向上」の二つのコンセプトが掲げられておりますが、今回の調査結果は、こうした方向性にも、道徳教育の充実が重要な役割を果たす可能性が示唆されたものと思えます。一方で、教師の指導に関する認識と児童の受け止めに一〇ポイント以上の差があることから、道徳教育、その要である道徳科の質的充実等をより一層図っていくことが求められます。

(教科調査官 堀田 竜次)

### 学会支部の活動の紹介

#### 北海道支部

北海道支部では、令和6年度も二回の学習会を開催しました。

「NEXT GIGA NEXT道徳教育フェスティバルin札幌国際大学」(8月)

今年度も多くのゲストをお招きして札幌国際大学にて2日間にわたって実施しました。「学習者主体の学び」「個別最適な学び」「協働的な学び」について複数の講座を開講し、学び合いました。

■「浅見哲也先生・安井政樹先生とともに子ども主体の道徳学習を探る」(3月)

初日は、浅見哲也先生(十文字学園女子大学教授)による公開授業「規則の中に込められた



浅見先生のご授業の様子

思いC遵法精神、公德心」を行っていただきました。教材は「二通の手紙」です。札幌市立真栄中学校の先生方を含め60名を超える参加者が見守る中、生徒たちの発言を引き出し続ける浅見先生の授業、圧巻でした。

授業後の道徳を語る会での「教師が一方的に教えるのではなく、伴走する、考えを引き出す授業だったように感じ

ています」という安井先生の投げかけに、参加者が大きく頷いていた場面が全てを物語っています。

2日目は、場所を札幌国際大学に移し、浅見先生の基調講演「子ども主体の道徳学習を探る」からスタートしました。子ども



実践発表の様子

主体の道徳学習を展開するためには、「道徳科は、何を学ぶ学習なのか」ということを、教師自身が考えることが重要です。そして、子どもたちが、「問題意識をもって授業に挑めているのか?」「道徳的価値を自分ごとにしてきているのか?」という視点で授業をデザインしていくことの重要性について御示唆いただきました。

後半は、札幌市道徳教育研究会の今年度の授業実践者による実践発表が行われました。札幌市立美園小学校石黒達也教諭、札幌市立発寒中学校石立あかね教諭からそれぞれの実践の成果と課題を発表していただきました。浅見先生、安井先生からは、発表から実践の成果と課題について多面的にご指導いただきました。

令和7年度も8月に「教育フェスティバル」、冬には講師を招いての学習会を開催予定です。

(根岸 良久)



## 神奈川支部

本支部も設立から早12年が経過し、新たな時代への組織改革に着手しています。多少の痛みも伴いますが、大切なのは踏み出す勇氣と考えます。

なぜいま支部改革なのかと問われれば、その要因は組織疲労にあります。前代未聞のコロナ感染症拡大に伴う社会全体の活動停滞も大きな要因には違いありませんでしたが、それ以上には神奈川支部の活動拡大に即応した組織再編成が遅れてしまったことこそ最大の要因でした。一部の執行運営役員に多大な負担が集中するとか、オンラインでのハイブリッド方式での支部活動となったことで、その手軽さからコロナ禍の状況回復以降も対面参加者が戻らなかつたり、会費未納者の割合が急増したりした裏事情もありました。

このような支部活動を展開する母体組織の弱体化が顕著になった事情から、支部活動を今後どう展開するのか、場合によっては休会や解散もやむなしの覚悟で支部会員全体の重要問題として学習会や支部研究大会等の機会を捉え、会員の皆様に訴えかけてきました。これは大変重い決断を迫るものですが、その背景には他支部に比べて若手会員が多いにも関わらず、組織を束ねる中堅層が予想外に育たなかったことも主要因として挙げられます。そこに該当する層の皆様は、ご自身が所属される組

織でも要職を担われており、無理強いすることは困難な事情でした。手軽なオンラインによるハイブリッド型学会活動に対する反動や人間関係の希薄化で支部活動の是非を問う状況に至ってしまったような次第です。

現在に至る12年に及ぶ支部活動の今後を巡って、役員会や全会員が参加する研究大会や学習会等の場で問題提起し、2月には次年度活動継続意思確認のアンケートも実施しました。次年度も会員として残留したいと申し出られたのは3割の方に留まりましたが、その強い継続意思をお持ちの皆様を尊重しつつ受け止め、組織改革を大前提に3月臨時総会を開催して次年度活動継続に向けた賛同会員各位の思いを再確認しました。

結論的に申し上げますと、神奈川支部は今後も活動を継続します。もちろん、遠隔地会員にはこれまで通りにハイブリット開催しますが、原則的には対面開催とし、従前のようなイベント型学会活動ではなく、互いに研究成果を持ち寄って切磋琢磨するような積み上げ型の学会活動に転換していくことを標榜しています。関係各位には、引き続きのご支援を賜りたくお願い申し上げます。

(田沼茂紀)



## 愛知支部

本年度、以下の活動を行いました。

■5月25日(土) 参加31名

【総会】

・令和5年度 活動・会計決算報告  
・令和6年度 活動計画・予算の承認

【講演会】

講師 四天王寺大学教授

杉中康平 先生

演題 「友のしようぞう画」の

模擬授業とその解説」

■9月7日(土) 参加20名

【研修会(実践発表)】

○竹井秀文先生(吉根小学校)

主題 「学校一体型道德プログラム

の構想と構築―公德心を高

める道德プログラムの一考

察―」

○加藤みゆき先生(山根小学校)

主題 「担任以外の指導による特別支

援学級における道德科授業」

■12月7日(土) 参加18名

【講演会】

講師 名古屋学院大学准教授

天野幸輔 先生

演題 「道德科の授業におけるI・C

Tの活用―アバター導入授

業の試みと検討―」

■3月1日(土) 参加18名

【研修会】

教材分析の会(主題 「節度節制」)

私たち、愛知県支部は、所属(小・中・高・大)、その経験年数、学会に所属

している・していないかに関係なく、道德の授業について率直に意見を交わし合ったり、先行研究されている方から直接お話を聞くとともに日々の実践に何が生かせるのかを考えたりする、まさに、「道德の授業をよりよいもの」としたい」という気持ちの者が自主的に集う、愛知道德研究会「はなのき」を出発点としています。

そして、今も、愛知道德研究会「はなのき」の思いや流れを大切にしながら活動を展開しようとしています。

ところが、会に顔を出してくる若者の数は減る一方。毎度おなじみのそこそこ経験・年齢を経た者のみが集うような会・活動となってきました。

「支部の運営をする私たちの感覚が、時代や若者にマッチしていないのではないか」「学会支部という名前が、仰々しい。だから、若者の参加を鈍らせているのではないか」「教員の働き方改革が推進されたことで、教員の研修は平日のみ。土曜日の支部活動を、学校には情宣できなくなった」等々、支部活動停滞の原因は、様々思い浮かびます。

しかし、そのことを嘆いても仕方ないので、支部創設の原点に立ち返り、「よりよい授業をしたい」との思いをもった若者が、「顔を出してみよう」「参加してみたい」と思えるように、一つ一つの活動を工夫・充実させるとともに、我慢強く多くの人へ参加を呼びかけ続けていくしかないと考えています。

(権田昭)

近畿支部

私たち近畿支部は、昨年に引き続き「子どもたちがよりよい生き方についての考えを深める道德授業の在り方」道德教育の本質を問いつながる」をテーマに、道德教育の本質からはずれることのない児童生徒への授業づくりを活動の中心にしています。主な活動として、5月に総会、5月・11月には支部員対象の学習会を開催しています。そして、8月・2月には、支部員以外にも広く参加を呼び掛ける「道德セミナー」を行っています。このセミナーでは、教材は同じでも、児童生徒及び内容項目によって異なった迫り方の複数の授業を見て研究討議を行っており、これは、近畿支部の大きな特長であり、これができることを誇りとしています。また、昨年に引き続き、実際の児童生徒への授業にこだわったセミナーを夏・冬とも開催できました。以下、今年度の具体的な活動について紹介します。

【5月11日(土)総会・第45回学習会】  
総会に続き、学習会を行いました。学習会は、川崎副支部長が主催する、「道德ナビ in 大阪」との合同開催でした。参加者に対しての模擬授業、教材分析を行い、参加者は25名でした。

【8月10日(土)夏の道德セミナー】  
山本支部員、中村支部員、中野支部員の三人の授業録画(教材「うばわれた自由」)を見ての研究討議、高宮支部員より、「自由」の内容項目の解説、



夏の道德セミナーの様子

川崎副支部長より「自律・自由と責任」の授業づくりのポイントの解説・指導案の提案がありました。会場は四天王寺大学で、参加者は81名でした。

【11月30日(土)第46回学習会】  
冬のセミナーの「プレセミナー」と位置づけ、7名の支部員による「模擬授業」によって、当日の授業者を決定する「選考会」を実施しました。参加者は27名でした。

【2月1日(土)冬の道德セミナー】  
大阪府泉大津市立誠風中学校を会場とし、1年生への実際の授業(教材「桃太郎」の鬼退治)を実施し、午後に研究討議を行いました。授業者は支部員3名と、教材原案者の尾崎正美氏、北海道から招聘した磯部一雄氏でした。その他、柴原顧問からの授業づくりについての講演等がありました。会場校の教員を含め、約130名の参加がありました。

(小山昌二)



冬の道德セミナーの様子

鳥取支部



公開授業の様子

本年度も、8月8日に小・中・義務教育学校の先生方の参加を得て、第35回鳥取県道德教育研究大会(大会テーマ「子供が求める道德授業を考える」)を開催した。



鼎談の様子

午前には、鳥取大学附属小学校6年生と前田明彦教諭による対面の公開授業と授業検討会をもった。検討会では「自分事として考える人物教材の授業づくり」について参加者とともに議論することができた。

午後の鼎談では、テーマ「子供が求める道德授業を考える」について、兵庫大學林敦司教授、兵庫県立総合教育センター萩野奈幹主任指導主事、米子市立加茂中学校南葉知佳教諭に、それぞれの立場から、内容の濃い協議を展開していただいた。

最後に「子どもが考え、議論する道德科の授業づくり」の演題で、十文字学園女子大学教授浅見哲也先生にまとの講演をいただいた。



浅見先生のご講演

2月の研修会は二つの柱で開催した。一つは「道德授業開きはこうやる!」のテーマで、鳥取市立湖東中学校前田静香教諭、

岩美町立岩美北小学校乾道夫教諭、本研究会村尾行也元会長による発表をもとにした研修。もう一つは、後述のミニ師道塾(輪読会)を行った。

また、本支部の特色ある取組である「師道塾」を毎月開催している。講師の竹内善一先生を囲んで、道德授業の根幹となる学びを重ねている。

令和7年度は第36回鳥取県道德教育研究大会(大会テーマ「器の大きな子供を育てる道德教育」敬する心、恕す心を育む授業づくり)を開催する。

期日・令和7年8月8日(金)

会場・ハワイアロハホール

○公開授業 ○授業検討

○授業対談「大会テーマ」

現場の実践者と大学教員との対談

○講演 北陸大学学長東風安生先生  
本研究会では、人物の生き方に学ぶ道德教育を提唱し研究を進めている。

子供たちに目指す人物像を思い描かせることで自らの人生をたくましく歩んでほしいと願ってのことである。今回は特に「人としての器の大きさ」に焦点を当てた大会を予定している。

(前田 哲雄)

岡山支部

岡山支部は、2020(令和2)年2月の第131回研究会開催以降、コロナ禍と参加者激減の影響で活動休止を余儀なくされていた。ところが、2024年8月、足掛け4年ぶりに活動を再開し岡山大学教師教育開発センター岡山ブランチで第132回研究会を開催することができた。それは、岡山県の道德教育を充実させたいと願う中堅若手の教員が結集した成果であるが、尾崎正美会員の尽力と、会場を提供してくださった岡山大学附属小学校の厚意によるところが大きい。

参加者の多くは初めての参加であったが、柴原弘志会長代行や横浜の吉野剛史会員がわざわざ参加してくださいとの有りがたかった。世話人としては一回きりで終わるかも?という不安を抱きつつの開催であったが、永田繁雄会長はじめ多くの方が再開を喜んでくださったのは嬉しいことであった。

その後も活動を維持でき、今年度はつごう3回研究会を開催できた。以下に発表者と発表題目を記しておく。

【第132回・令和6年8月18日】

①古市剛大(赤磐市立桜が丘小学校)

「自己の生き方を深めるための展開後段の在り方」

②片山健治(岡山県立岡山大安寺中等教育学校)

「Society5.0時代における道德科教育学の在り方」

③尾崎正美(瀬戸内市立国府小学校)

「こんな道德科授業をしたい!」  
道德教育実践ここが困っている」

【第133回・令和6年12月1日】

①今岡由佳(岡山市立富山小学校)

「子どもの自己内対話を促す道德科授業」

②秋山博正(兵庫教育大学)

「教材分析シート」を活用した道德科の授業づくり」

③大西理沙(岡山大学教育学部附属小学校)

「発問を吟味する」

【第134回・令和7年2月8日】

①吉野剛史(横浜市立東台小学校)

「パッケージ型ユニットでつくる道德科授業」

②近藤広理(岡山県総合教育センター)

「自己内対話で見つめる道德科授業」  
「自分の『ものさし』を問い直す道德科授業」

(秋山博正)



岡大附小での研究会の一場面

四国支部

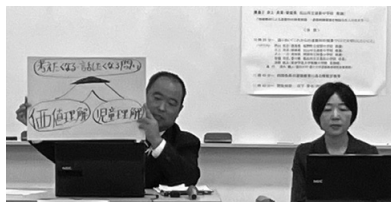
四国支部では、毎年度2回の学習会を開催しており、令和6年度は、香川県、高知県で学習会を行いました。

【第1回】香川会場

期日:令和6年11月10日(日)

会場:香川大学教育学部内四国地域教職アライアンス香川大学センター

参加者数は対面とオンライン併せて約70名。本学会(研究委員会)との共催となりました。当日は、四国各県からの実践発表と「これからの道德科の授業づくりで大切なこと」についての意見交換が行われました。実践発表では、「子ども一人一人を大切に」



学習会の様子

「地域教材による道德科の授業」  
「論点が明確で、生徒の思考の手助けとなる道德科授業の工夫」  
「地域教材による道德科の授業実践―道德的諸価値を物語る先人の生き方―」と題して、柔軟な発想に基づく開発的な実践が紹介されました。

【第2回】高知会場

期日:令和7年2月8日(土)

会場:南国市地域交流センター

参加者数は対面で約50名。当日は、四国各県からの実践発表をもとに「道德の本質を踏まえた道德科の指導の工夫」に関して活発な意見交換が行われました。また、講師の堀田竜次教育課程調査官(国立教育政策研究所教育課程研究センター)から、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図った道德科の授業」と題してご講演をいただきました。堀田先生からは、令和6年12月25日に出された諮問等を踏まえ、デジタル学習基盤を活用した

これからの道德科の授業等についてのお話をいただきました。激しい変化が止まることのない時代を生きる子どもたちに必要な資質・能力を養う道德科の在り方について参加者一同大いに研鑽を深めました。

なお、四国支部は、令和6年度で設立10年目を迎えたことから、この日の学習会では、「四国支部10年の軌跡」と題した冊子も配付され、「四国は一つ」を合言葉に積み重ねてきた10年間の歩みを振り返りました。本冊子の巻頭には、「本会の地道で継続的な活動や学びが四国の子どもの道德科での学びの充実や各校の道德教育の推進につながることを願っています」と七條支部長の言葉が掲載されています。私たち支部会員は、この思いとともに、これからまた、研究の新たな足跡を刻んでいきたいと思えます。

(森有希)

九州支部

九州支部では、研修のコンセプト「理論と実践の往還を！」で、次の五つの視点を大切に企画しました。①年3回持続可能な回数を！、②対面とオンラインで参加しやすい体制を！、③理論をもとにした実践の具体化（学術研究者と実践研究者のコラボ）、④模擬授業や授業参観（VTRも含む）をもとにじっくり研修、⑤道德談義…各県の道德自慢を！

【活動報告】

■第1回総会、研修会 5月6日

JR博多シティ会議室 視点③⑤  
総会後、永田繁雄会長（東京学芸大学）から「道德教育の課題と今後の方向性」のご講演をいただきました。道德教育の方向性を見据えた船出となりました。

■第2回研修会 8月17日 福岡教育

大学附属福岡小学校 視点③④⑤  
友延倫子会員の授業VTR（主題名「手を理解する心 B相互理解、寛容教材名「ぼくだって」(日本文教出版)」を視聴し、「ウェルビーイング」をテーマにグループ協議を行いました。指導助言を九州支部会員の山岸賢一郎会員（福岡大学）、作田澄泰会員（九州女子大学）、足立佳菜会員（佐賀大学）、講師の荒木寿友先生（立命館大学）に全体総括をしていただきました。理論と実践をつなぐ、とても有意義な研修会となりました。

■第3回研修会 12月21日 福岡県春

日市立春日西小学校（ハイブリッド開催）視点③⑤



オンライン対談の様子

堀田竜次先生（文部科学省）と柴原弘志先生（京都産業大学）にオンラインで「小学校・中学校の系統性を大切にしたい授業づくり」の対談をしていただきました。その後、「泣いた赤おに」（東京書籍）を共通教材として、小学校低、中、高、中学校で大切にしたい授業づくりについてグループ協議を行いました。最後に、堀田先生、柴原先生にご指導をいただき、内容の系統性、学び方の系統性、発達の段階を考慮した授業づくりについて深く学ぶことができました。

■自主研究会（共催…上廣倫理財団）

2月22日 JR博多シティ会議室  
井上結香子先生（文部科学省）から、「今必要とされる中学校の道德の授業」のご講演をいただきました。高等学校の「公共」「倫理」の内容も紹介していただき、学びを深めることができました。

令和7年度は、九州各県の道德教育の充実と、会員の研修ニーズを大切にしたい支部運営を行います。8月は熊本で研修会を開催する予定です。「九州を道德でむすぶ」を合い言葉に、九州支部会員相互の絆を深めてまいります。

（木下美紀）

シリーズ・日本の道德教育への提言

「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」と道德教育

—日本の伝統や文化を道德的視点で探求する—

板倉栄一郎

文部科学省が発行した『第4期教育振興基本計画』のリーフレットの冒頭に、「日本発」を冠した「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」がコンセプトの一つとして掲げられている。「日本の社会・文化的背景を踏まえ、…」と説明されていることから、「日本社会に根差した」という表現と対応していることが解かる。

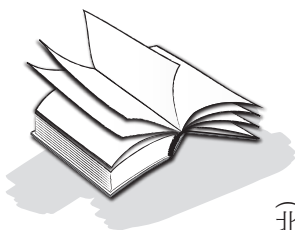
人間は社会的動物であり、人とのつながりやかかわりを避けて通ることができない。それがウェルビーイングの協調的要素とも関係することは言うまでもない。道德教育では、道德的社会的の達成がウェルビーイングの向上に関係する。一方で、現代の日本社会の実相に目を向けると、家族の「個化」、人間関係の希薄化・個の確立の「私」の優先へのすり替わり（貝塚茂樹「戦後日本教育史―「脱国家」化する公教育」）が見えてくる。日本の社会・文化的背景を踏まえた道德的社会的の育成を声高に叫ばなければならぬような状況にあるのである。その背景には、秩序維持や相互扶助、共同体の成員としての常識を身につけてきた日本社会の特徴の一つである「世間」の衰退が読

み取れる。

学級に目を向けると、スクールカースト―学級での序列があり、自身が所属しない集団は認知の対象外である―や、キャラ化―外キャラを演じることので所属する集団で互いに「空気」を読み合い、「承認し合う」が常態化しているという（土井隆義『キャラ化する／される子どもたち』）。この見解に従うと、このような状況の中で教師は、多様な価値観を認め合うことを教育活動を通して理解させなければならない。

VUCAの時代を乗り越える人間の育成に重点を置く現在の学校教育である。先人は「世間」の中で建前と本音をうまく調整しながら生きてきた。「世間」に生きた人々には人間が生きていく上での様々な知恵が詰まっている。SNSやAIの登場によって他者と直に触れ合う機会が少なくなった時代であるが、今、改めて日本の伝統や文化を探求することでVUCAの時代と向き合う「何か」が見えてくるはずだ。教育の不易とは即ち、「人間を知る」このことに尽きるところ。それを達成することこそがウェルビーイングの向上につながるのである。

（北陸大学）



## 『児童道德判断の発達』

ピアジェ

本書は、調査によって、子どもの規則の実行の仕方や規則の意識を明らかにしたり、拘束の道德と協同の道德の違いを明らかにしたりした国際的にもよく知られた古典的な名著です。

原著は、ピアジェによって、一九三二年にフランスで出版されました。日本では、一九三六年に、霜田静志、竹田浩一郎訳編でその抄訳本『ジアン・ピアジェ子供の道德観』が出版されており、さらに大伴茂による全訳本『児童道德判断の発達』が一九五七年（私が持っている本の奥付ではそうなっているが一九五四年とするものもある）に出版されています。

ピアジェは、発達心理学の立場から、質問と診断からなる臨床的研究手法を確立しましたが、その手法が本書でも活用されています。

たとえば、規則の実行については、マール・ゲームのやり方を子どもにも尋ね、次のような四段階を見出ししています。第一段階は、純粹に自動的な個人的な段階で、欲望のままにマールで遊んでいる。第二段階は、自己中心的段階で、出来あがっている規則を模倣するが、自分流に利用し、一人で遊ぶ。第三段階は、初期協同の段階で、仲間と勝とうとする。第四段階は、規則制定の段階で、真に規則を尊重する

## 9 道德教育を支えてきた名著

ようになる。

また、二つの話を聞かせて、どちらがより悪いかということを探ねる調査も大変興味深いものです。二つの話の一例をあげます。

A: ジャンは、うっかり扉を開けて、その向こうの椅子の上のお盆にのせてあった十五個のコップを割ってしまった。

B: アンリは、留守中にこっそり戸棚の中のジャムを食べようとして、傍らにあったコップにさわったところ、そのコップが落ちて割れてしまった。

ピアジェの調査では、十歳までの子どもには二つのタイプの答えがあります。一つは、物質的な結果で判断し、たくさんのコップを割ったAの方が悪いと考えます。もう一つは動機を問題にします。何をしようとしていたのか判断に影響します。Aの方が悪いと考えます。年齢があがるにしたがって、Bの方が悪いと答える子どもが増えるそうです。

そうだとすると、小さな子どもは、動機が分からないと言えるように思いますが、ピアジェは、かならずしもそうではないと考えているようで、大人の拘束の影響だと見えています。つまり、大人は、たくさんのコップを割るとひどく怒るので、子どもはその影響を受けると考えているのです。たしかに、ひどく怒られれば、それを悪いことだとみなすようになるでしょう。けれども、大人は動機がわかるはずで、子

どもに詳しい事情を聴く前に、なぜ怒ってしまうのでしょうか。

その理由は、読者の皆さんにお考えいただくとして、私はこのピアジェの主張を読んだときに、調査結果からある仮説（あるいは理論）を想像するところがいかに難しいかということを強く感じました。つまり、ピアジェは、調査結果だけではなく、おそらく彼が日常的に感じていることがらを判断材料として利用しています。

私は、人間を対象とした道德の調査研究が、日常生活から完全に離れたところで成立するとは思っていませんので、こうした研究のスタンスは嫌いではありません。しかし、厳密な研究デザインを求める方々から、こうしたピアジェの研究がどう見えるのだろうかということには気になります。

ピアジェの研究は、古典と言ってよいと思いますが、本学会でそれに関する研究発表はそう多くはありません。学習指導要領等でも「発達の段階を考慮し」という言葉が使われていますが、それは「各学年段階での発達に応じて」というような意味でとらえられているように感じます。それでは、おそらく、便宜的に区切られた連続的な成長の一面ということになってしまいます。ピアジェやその後継者たちが言うような、認知構造の質的な変化を伴うような発達段階説の意味をもう少し考えてみるのもよいように思います。

（上越教育大学 林泰成）

## 編集後記

今回、巻頭言をご執筆いただきました前広報委員長の廣川正昭先生からバトンを受け、2022(令4)年7月10日発行の第73号から計12回分を担当させていただきます。

12回分を振り返りますと、巻頭言に始まり、多くの皆様から興味深い原稿をたくさん送っていただきました。編集担当としては、それを一番に拝読できる特権を感じながら作業をしていました。

特に、教科調査官の先生方からは、毎回、「文部科学省における道德教育の新しい動き」を私たちにお届けくださいました。ありがとうございます。また、「道德教育を支えてきた名著」シリーズは、それぞれのご専門の先生にご執筆いただいたことで、限られた文字数にもかかわらず、とても分かりやすい内容にさせていただきました。

「論文執筆のための講座」と「高等学校における道德教育」も、4回シリーズで内容の濃い学びとなりました。原稿をお寄せいただいたすべての皆様に感謝申し上げますが、紙面がありません。皆さん、このような思いだったのですね。本当にありがとうございます。

そして、次の広報委員会に担当していただく第85号の会報も楽しみにしています！ありがとうございます！

（広報委員）